

親鸞の生涯



幼いながらこの忠安のなみなみならぬ求道心（仏の道を求める熱意）にうごかされた慈円慈鎮和尚は、ただちにこの子の得度の式を上げ、法名を「範宴（はんねん）」とつけ、しばらくは青蓮院においてお坊さんとしての教育を始めました。

親鸞は、今からおよそ八百年まえ、承安三年（西暦一一七三年）の春、五月二十一日に生まれました。

いう貧乏貴族を父とし、源氏から嫁いできた吉光女という母のもとに、男ばかりの四人兄弟の長男として生まれました。子供のころの名前は「忠安（ただやす）」と言います。父の有範はすでに官職から退いておりましたから親のひぎ元で子供たちを育てることも出来ないほどの貧乏なくらしでした。そのうえ母の吉光女は病氣がちで、忠安さまが九歳になると亡くなってしまいます。

後に残された子供たちは、伯父にあたる日野範綱と言う方の世話でそれぞれ比叡山や三井寺に預けられていき、長男の忠安だけは母の遺言どおり東山の青蓮院で彼の有名な慈円慈鎮和尚を導師として出家得度しました。時に養和元年（一一八一年）の春でした。

しかし、なんといったもまだ9歳。出家得度してすぐに厳しい修行にはいるには不安があります。もうすこし先へのばしてもと制する人達に対して、幼い忠安が歌つた歌は有名です。

亡き母の切なる願いとはいえ
緊迫した思いが伺えます

明日ありと
夜半に嵐の吹かぬものかわ
(ほとけの道を求めるについて、そんなにあ
せらずとも明日があるではないかと、はかな
い歓楽にひたるその夜なかにも、無常の嵐が
襲いかかって、いのちもおとしかねないでは
ありませんか)

A black and white illustration of a flowering plant, possibly a chrysanthemum, with several long, thin leaves and a cluster of small flowers at the top.

親鸞聖人は、九〇歳の生涯のうち、その著述にも語録にも、ただの一度も自分の出自（血筋・家柄・身分）について言及したことはありませんでした。

その当時は最も厳しい階級身分社会で、藤原氏・平家・源氏などの一門でなければ社会に認められなかつた時代です。親鸞様は一応藤原一門でありながら、なぜそのことを敢えて言われなかつたのでしょうか。

ここに親鸞聖人のお人柄、親鸞聖人の教えの特徴特質がうかがえるように思います。

翌年（1182年）の一月、お師匠さま慈円慈鎮和尚に伴われて、当時の国立大学であつた都の北に聳える比叡山東塔無動寺大乗院に入ります。ここからいよいよ親鸞様の厳しい仏道修行が始まるのです。

それは痴呆になつた彼女がとても奇麗だつたからです。

亡くなつて早七年立ちますが、わたしはあの介護、あの痴呆、あの彼女から、人間ほんとうの生き方死に方を教えてもらつたのだといまさらながら夫婦のご縁を喜ばずにはおれません。

痴呆になつてからの彼女のキーワードは二つです。

食べ物や服装、居場所・行動。何についてもあれこれ選択したり好き嫌いを言わない。

あれこれ分別したり選別する能力が失われてしまっているのか。ものにこだわり執着する力も失せてしまったのか。あたえられたあるがままをそのまま「結構です」と全部受け入れてしまいます。

それで「有り難い」のでしょうか。
そういう世界に伸び伸びと生きていたよう

そういう自然の、こだわりもない、伸び伸びとした世界を、彼女は「南無阿弥陀仏」という念佛のなかで生きていたのではないかと思わずにはおれません。

うな人」というのはこのことなのだ、と教えられたました。

妻は、子育てに忙しい頃から、寺のお説教に熱心にお参りしておりました。不信心なわたしはそんな彼女を心のなかで馬鹿にしておりました。その彼女が、夫婦の終わりになつ

て、痴呆を通して、ほんとうのいのちの美しさをわたしに教え残してくれたように思います。

三月
弥生

三日	月初参拝
五日	桃の節句
六日	啓蟄 あすなろ
十一日	初田寿太郎氏宅法事
十二日	澤田由男様忌明法事
十三日	福成寺前々坊守様忌明法事
十八日	彼岸の入り・石田隆男氏宅
十九日	高校 P.T.A 役員会
二十一日	彼岸会法要
二十三日	合同役員会
二十五日	山田花子氏宅法事
二十六日	坪来隆晴氏宅法事
二十七日	兼井元三郎氏宅法事
二十八日	福富ことえ氏宅法事 みのりを聞く会 出石組組内会 信楽先生傘寿祝賀

月に一度のこの「みのりを聞く会」は、一
体いつから始まつたのだろう。『勝林寺時報』
のこよみを繰つてみた。『寺報』創刊の昭和
五十六年十月号にはすでにその案内が載つて
いる。前住のおぼろげな記憶では、それより
4～5年も前、九州伊集院でカウンセリング
の研修会から帰つてきてその土産話をしたそ
のときから始まつたのだという。するとこの
会、三十年続いていることになる。

その当時はすでに高齢化社会・過疎社会が
はじまつていて、聞法の機会や便が得にくく
なつて来ていた。仏壯・仏婦の有志がせめて
月に一度と設定して下さつた。はじめの頃は
会員の「家庭法座」のかたちで進められて
いた。毎月25日か26日の夜であった。

平成になつてしまらしくして法輪会がお世話
をして下さるようになつた。法輪会というの
は出石組の『連研』を履修した人の会。出石
組のこの会は解散してしまつたが、勝林寺に
はなお健在。聞法活動の推進役として活躍し
て下さっている。

父の写真

あるご住職のご法話

火葬場から遺骨を抱いて親族が帰ってきました。仏壇よこの床の間にしつらえた壇に遺骨・遺影をお祭りしてさっそく還骨勤行を始めました。お勤めをしながら気がつくと、いま持ち帰った亡きお父さんの遺影、写真がしょく濡れているではありませんか。思わず外を伺つて見たのですが、雨の様子はありません。なんだうなせだらうと思ひながらお勤めが終わつて、例の「白骨のご文章」も拌読して一切の儀式は終えました。

ご挨拶に進み出られたのは、亡き人の娘でこの家の跡取り、30代なかばのお方。

「申し分けありませんでした。父の遺影にかかる涙も拭わないままお祭りするなんて。こんな無作法、皆様にもまた死んだ父もなんとお詫びしてよいか。実は私、死んだ父とは、犬猿の仲といつてもいいほど馬が合いませんでした。いつも仲たがい、言い争いの絶えない毎日でした。女の立場・若い者の言ひ分・所帯もつものの主張。そんなものがこっちにはあって、そこから父親というもののあるべき姿を描いて、それに合わない父親いつも突っ掛かっていたように思います。」
「父親らしくうシャントしてよ」

「昨日、外へ出て行つた私の姉が帰つて来ていて、死んだ父の背広のポケットから、「こんなものが財布の中にあつたよ」と、見せてくれたもの。それは茶色に変色してしまつてある小さな写真。中学生だった私の肩を優しく抱きすくめている父の姿。とっても嬉しそうな父の笑顔。……。昨日今日とお通夜・お葬式の間じゅうわたくしはそのことばかりを考えおりました。自分の立場から、自分の都合のいいように父親の理想像を描いて、それに沿わない父親に突っ掛かり反発していた私。しかしそんなわたしの肩をいつも優しく抱いてくれていた父。

火葬場で、父を火葬にしてしまつてから、私は本当の父に出会えました。全くの手遅れ

でしたが。でも、どこかで聴いた「死は、死者との関係の始まりである」ということはほんとうです。これからはこの父との新しい出会い(ご縁)を大切に信じながら、運ばせながらの親孝行をしなければと思ひます。

ご住職は、ことばを添えられました。

煩惱の根源は、無明と渴愛。

自分の立場でしかものを見ない、自己の見解だけを主張して、それを人様に押し付ける。そこに凡夫のあさましい対立・争いの世界が生まれる。

「有為の奥山今日越えて」とは、そのところを越え名にさいとの教えが仏教。。また涅槃とか生死解脱とか、生死いすべき道というのは、すべての我執・すべてのたらわれを越えさせて下さる如来さまの働きに由覚めよということそれが仏道とわたしは聴いております。

支えられて、助けられて、生かされて生きているわたしに気づかせていただきました。これを「縁起」と言うのだということも聞かせていただきました。
感謝のきもちでいっぱいございます。

それからもうひとつ

本堂内陣のお掃除をさせていただいたときふと、五十年前、小学生だったころ、あれはカネ工(梵鐘・鐘楼建設法要)のとき、頭のうえの冠を気にしながら歩いた稚児行列のことが頭の中を走馬灯のようによぎりました。わたしの実家もまた義母の里も祖義母の生家も、みなみな勝林寺門徒でござります。みなみでない遠い昔からのご縁でした。

ご縁のなかに 仏婦会長退任のことば

大石 正代

このように気づいて見ると、時間的にも遠い遠い昔からのご縁。空間的にも広い方々の支えがあつて「今」を生かされていました。このことに気づかせていただきました。

住職さま坊守さま、また広く多くのみなさまとの今日の出逢いにめぐまれて、この「一期一会」の宝物を身にした喜びのうえからは一層聴聞にこころをいれて。みほとけさまとみなさまのご恩に報いたいと思います。

在職二年間、ほんとうにお世話をなりました。このことばを口にするたびに「みんなの協力」でなりたつているこの仏婦。そしてその中に勤めさせていただくこのわたしのしあわせをしみじみ実感させられたものでございます。

この役をいただいたおかげで、わたしは大きな些細なことでも、たくさん援助がなければ成功しない。

どんな小さな事柄でも、目にはみえないたさんの助力がなければ成り立たない。どんなにこころ貧しい私であつても、みなさまの支えがあればこそ生きて行ける。

これからもわたしたちのこの出逢い「勝林寺仏教婦人会」が、みんな心寄せ合つて、ますます発展しますよう祈念して、退任のことばとさせていただきます。